
月夜の紫陽花（あじさい）

あひる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月夜の紫陽花
あじさい

【Nコード】

N9872V

【作者名】

あひる

【あらすじ】

「何だっていつかは消滅するものなんだよ」田中水樹は現存する世界の全てに価値を見いだせない、まことにひねくれた小学生だった。ある吹雪の路上で、彼は凍えて今にも死にそうな『悪魔』に遭遇する。助けてもらったお返しだと、ひょうきんな『悪魔』は、何の変哲もない黒いフレームの『めがね』を差し出すが……。悪魔をテーマにしたらこうなっちゃった物語。どうしてこんなませたガキになったんだろ……。

みんなそんなやつだった（前書き）

作者は社会批判をする気は毛頭ありませんし、主人公のような感性も持ち合わせておりません。幼稚な文体ですが、ご容赦ください。

みんなそんなやつだった

時計の針が 12:35 を指し示す。

扉をスライドさせるなり、目に飛び込んできた自分の机の惨状を見て、田中水樹は眉をひそめた。

今朝方、背景にチワワが印刷されたカレンダーが一枚めくられ、そして破りとられた。現れた『2012年 2月』の文字を見ても、その下に羅列された日付を見ても、無邪気におもちゃを転がす豆柴を眺めても、水樹の心には一切の感慨もわかなかった。雪が昨日から絶えず降り続き、世界が白に塗りつぶされていようと、水樹は子供のようにはしゃぐ事も、雪玉をぶつけ合う事もしなかった。ほかの子供達が暖かそうな上着を重ね着していても、水樹は——去年のクリスマスに妹の編んでくれた手製のマフラーを除いて——防寒対策を、自身には申し分程度しか施さなかった。住宅の屋根の裏に作られたツバメの巣が、寒風に寂しく吹かれていても目も向けず、公園の敷地内に愉快的装飾をされた雪だるまが放置されていても、冷たい無表情を崩さなかった。

水樹のそういった振る舞いは、暗に彼が世界の何にも興味がないと示しているようで、そしてその通りだった。二月が終われば、当たり前前に三月が来るだけ。カレンダーは再びめくられるだろう。平面に閉じこめられた『過去』の存在は、いずれゴミ処理場にて無にかえる。つもりにもつた白銀の結晶は、春の訪れに浸食され、一つの例外もなくいずれは蒸発する。

何だっていつかは消滅するものなんだ。少々ひねくれているといえる水樹の感性は、小学校にあがる以前に、一つの『答え』にとどり着いていた。それが『正しい』かはともかく、事実である事は疑いの余地もない。すべては等しく平等に、いつかはなくなってしまうのだ。そこに付随する、存在する『理由』も『意味』も『価値』も、たどり着いた『答え』の御前ではただのこじつけに成り下

がるのだ。

そう思えた時、水樹は同時に、自分は一つのめがねを手に入れたのだ、とも思った。そのめがねのレンズは、この社会をくまなく、そして『ありのまま』に映し出す優れもので、水樹はこのめがねを手に入れて以来、この世の一切がひどくつまらなく、ひどく色あせて見えたものだった。雑貨店の店頭に並ぶ数々のオブジェは、がらくた以下の存在にすり替わり、熱狂的なファンを率いるアイドルの端正な顔立ちが、畜養される豚にしか見えなくなった。最終的に、水樹はあらゆる要素を含めた『娯楽』という言葉そのものの価値を否定するに至った。だから、『社会人』が労働の対価として得た給与、その行き先があまりにもばかばかしくて、水樹は曇ったためがねしか手持ちにない彼ら大人達に同情してしまったほどだった。水樹にしてみれば、彼らは寿命と引き替えに砂山を築き上げ、そして自分で崩してしまうような愚か者と、大して差がなかった。

そういった経緯で、水樹は『楽しみ』『悦楽』『風情』といった感情を失った。水樹にとっては、そんなものは等しく『無価値』なものであり、失ったのではなく、自分の表面から洗い流されたのだと考えた。

やがて、水樹に残ったものは、不快な現象や無益な行いを嫌う人間の本能、それだけとなった。

だから、水樹は雪玉をぶつけ合うあの遊びのどこが面白いのか、てんで理解できなかった。ぶつけてぶつけられて、互いに苛立ちや怒りを沸き立たせる行為の、いったい何が楽しいのか。笑っているあいつらが、薄気味悪くてかなわない。まさしく狂気の沙汰じゃないか。いつだってそう思って子供達を見つめていた。

だから、

今日の昼休みに軽い用事を済ませ、職員室の扉を閉めて教室に戻った時、

扉をスライドさせるなり目に飛び込んできた自分の机の惨状を見て、

田中水樹、生まれ月の星座が羊座の十二才は、眉をひそめたのだ。
った。

窓側に最寄りの列、その最後尾が田中水樹の席だった。

そして現在、彼の机が明らかに、好ましくない意味での異彩を放っている。

木製の机の上に、黄色いチョークによって殴りつけるように書かれた『死ね』の文字。椅子が蹴り倒されている。近くの床には、黒いランドセルが、口をびろんと開いたまま死んだように転がっていた。よほど丁寧に踏んでくれたようで、ランドセルの表面が黒よりも靴跡の白い線の方が目立ってしまっている。毎度毎度ご苦労なことで、水樹はそんな皮肉を口にした。しまわれていた教科書の類は、どうせ例外なくまとめてゴミ箱の中であろう。やるなら、燃やすくらいの事をしてもらえば、こちらとしてもありがたかったのだが。水樹はとりあえず椅子を定位置に戻すと、さらなる点検を開始する、……小さくため息を漏らしながら。

別段悲しくも悔しくもないのだが、自分を巻き込まないでほしかった。こういった無益な行為を好む愚者は、世界規模でどこにだっている。それは、人間の設計図、『ヒトゲノム』とかいうのがそういう『図面』になっているからなのだと、市立図書館の本に記されていた。当時、四年生の水樹はそれを読んで「なんだ。福沢諭吉は嘘つきだったんじゃないか。何が天の上にくだつ。平等なんてありやしないんだ」と、腹立ち紛れにこう叫んだ。

田中水樹は世界に絶望しているわけではない。悪人の活躍する世界に憤りを覚えるわけでもない。だって、彼にとって万物は名称以上の意味を持たないから。社会がどうなろうと、彼の知った事ではない。水樹の持論としては、誰だって生来、罪を犯す可能性を腹の底に所持している。人間は黒いの生き物だ。人間が人間である以上、最小単位が人間である社会は、どうしたってこうであり続けるのだ。でも、ただひとつだけ、

そんな醜い喧噪に、自分を巻き込まないでほしかった。

『奴ら』に対する不満を爆発させる事は実にたやすい。拳をふるえばそれで済む。水樹の中にたまっているのは、その程度の怒りだ。しかし、爆発によって水樹までもが絞られては本末転倒であり、また根本的な弊害として、それによる『よくない波紋』が、二学年下の妹の環境にまで及ぶ事を水樹は嫌う。実際、一度『奴ら』の一人に泣き面をかかせてやった際、後処理がとても面倒だった。故に彼はこの『いじめ』を仕方がなく甘んじて受けていた。

どのみちあと二ヶ月弱で、兄妹は転校する手はずとなっている。

水樹は気づいた。机の横のフックにつり下げられていたはずの運動シューズの影がない。どこだ。シューズの行方を探すべく、水樹は教室全体を見渡す。

何の変哲もない教室が、水樹の視界の全てを満たした。席に着いている女子が見受けられないのは、最近、皆一様に熱を上げているなわとびの練習をするべく、体育館へ足を運んだからだろう。前方の緑色の黒板には、机の文字と同じ色で、何かのキャラクターが下手くそに落書きしてある。砂糖に群がる蟻のように、教卓周辺に集合した男子クラスメイト数人が、磁石を用いてお遊戯をしている。電気ストープが暖かな空気をはき出す先に、彼らは陣取っていた。困っているはずの水樹には目もくれない。『奴ら』の存在がネットクとなっているのか、それとも本性がそうなのか。磁石をいじるクラスメイトは、かつて水樹とよく口をきいた人物ばかりだった。別に楽しいからつるんでいた連中ではないので、水樹は彼らが自分に対しどのような態度をとろうと一向に構わなかった。ただ……、

視線をそらす。黒板の隣には掲示板、貼り付けられたお知らせのプリントが、片の画鋏を失ったために斜めにつり下がっている。クラスメイトが一人、ぱたぱたと足音を立てて、笑顔で教室へと帰ってきた。しもやけた手のひらをこすりつつ、寒さで真っ赤に染まっていたほを緩ませて。クラスメイトは黒のコートを着用している。外で雪合戦でもしていたのだろう。水樹はそう推察した。コートが掲示板の前を横切る。そのまま教卓の群に飲まれた。巻き起こった空

気の渦にさらされ、プリントはゆらゆらと左右に揺れていた。

いや、そんな事はどうでもいいのだ。

水樹は右足を踏み出す。その目で、その手で、教室のありとあらゆる箇所を探った。協力者はいないが、高望みをするわけにもいくまい。無視、それだけで済ましているあいづらは、まだ善良な部類なのだろう。しかし、いくら探してもシューズの行方は依然として分からずじまいで——時計の針がかちつと進み 12:47 を指した。結局、ゴミ箱の教科書を取り戻し、引きちぎられたお守りを発見した以外に、目立つ収穫はなかった。水樹は再び、自分の机に戻ってきた。

教室の左端で、濡れ雑巾を片手に机の上の悪意の塊を消しながら、水樹はシューズがどこに隠されたのかと頭をひねった。次の授業は体育だ。結露した水滴が、曇った窓ガラスの上を垂れてゆく。朝から深々として降り止まぬ雪を見れば、授業が体育館で行われる事は想像にかたくない。

トイレ、下駄箱、特別教室は線が薄いだろう。『奴ら』だって、何も好きこのんで先生の面倒なお叱りしかを受けたいわけではあるまい。いや、下手をすれば、外の水道で凍りつかす程度の事はやるのかもな、そんな想像をしながら、水樹は席を立った。彼を見やる『子供』は誰一人いない。

（時間ないっていうのに、気だるいなあ）

水樹は、のど元にこみ上げる欠伸の衝動をこらえようとすらしなかった。

その行動一つ一つが、『奴ら』の思うつばだと理解していても、だ。

変化があったのは、教室を出て、ひとまずトイレに向かおうと足先をそちらへ向けた瞬間だった。教室内の暖かすぎて逆に不快な暖気が、肌からめくれ落ちてゆき、温もりを感じさせぬ寒気が心地よくまとわりついた、その瞬間だった。何か——白い履き物のような何かが、平坦に近い山なりを描くのを、水樹は見た。空間を飛ぶそ

れの軌跡を目で追いながらも、水樹の顔色は変わらない。十中八九、かかと部分に田中水樹と書かれたシューズだ、そう分かっていても、表情はみじんも揺らがなかった。その白い物体は蛇行も失速もせず、不自然に開いた窓を、四角く区切られた窓枠の中央を、ただ通過したのだった。

「ストライクッ」と、もはや聞き慣れた汚らしいがらがら声が、耳孔に滑り込んできた。飾りも偽りもない能面を、水樹は声の主へと向けた。『奴ら』が水樹のシューズを、校舎二階の窓から放った、その事実さえ分かれば、ほかの事など水樹には関係がない。『奴ら』が猿のように喜ぼうが、犬のように吠えようが、心底どうでもよかった。

「ナイスコントロールだぜっ。たつや」再び、がらがら声が『たつや』を賛美した。「よっ、さすがはリトルのエースっ」と、今度はやけに甲高い声が調子づいてそう言った。

「いや、おまえら。俺は下の壁をねらったつもりだったんだよ」と、大將はこれ見よがしに顔をしかめて、大ほらを吹いた。

依然、水樹は、産毛うぶげも動かぬような無表情だった。大切な物を欠かした冷酷な視線が、三人組へと注がれている。問題の窓から雪の花びらが吹き込んで、硬い廊下の上で融解した。傍目はためには水滴すら見えなかった。

三人組が水樹を目の敵にするようになったのは、去年の事だ。燃えるよう色彩の紅葉もみじが一枚、また一枚と散ってゆき、道ばたに枯れ葉の目立ち始めた、そんなものの寂しげな晩秋の季節だった。それは、水樹がまだ友と呼べる存在を失っていなかった頃の事だった。

三人組——大將の平田悟ひらたごう。三人の中では一番大柄で、腕力も飛び抜けて強い。腰巾着の新田大介にっただいすけ、及び浜口洋助はまぐちようすけを含めたこの三人組は、地域でも札付きの悪として有名……ほどではないかもしれないが、教職員の悩みの種になるくらいは、悪ガキを演じていた。始めは、花壇を荒らす、他人の所有物を隠す等、奴らの行動はただの悪戯に過ぎなかった。それがいつしか増長して、他人の物を平気で盗

み、暴力を働き、挙げ句クラスメイトに金品まで要求するようになった。万引き窃盗の常習犯で、警察にお世話になった前科も持つ。彼らの頭にモラルなど欠片も詰まっていなかった。

キン コーン カーン コーン

「やべつ。次は体育の授業だったよな？ 落ちちゃった俺のシューズ、どうしようかなあ」 平田悟は頭をかきながら金魚の糞共にそう訊いた。「おまえら、替えのシューズとか持っていないか？」

「ああ、ちょうど二つ持ってるぜ、貸してあげるよ」とがらがら声で新田大介がそういった。嫌な笑みが口元に浮かんでいる。「急がないと、またあの筋肉馬鹿に拳骨くらわせられるぜっ」

彼らが去ってゆく。水樹は終始、立ちつくしたままだった。背後から爆笑が聞こえてきて、ようやく水樹は動き出した。迷わず階下へと降りてゆく。階段部の蛍光灯から薄ぼんやりした白光が放たれて、水樹の足下に濃い影が溜まった。

ああ、腹立たしい。

階段を下りながら、水樹は考えた。彼らは何を思っているといった行為を繰り返すのだろうか、と。他人をおとしめるのが楽しいのだろうか、楽しいのだろうか。だから、叱られても痛い目を見ても繰り返すのだ。まるで、水樹にとっては見かけ倒しのスイーツに、騙され引き寄せられるように。

田中水樹と例の三人、両者は共に、社会など毛ほども尊重していない。律法など猫のエサにもくれてやれ。律儀に守る義務など自分にはない。その点で両者の考えは完璧に一致している。彼らが袂^{たもと}を分かち理由は、欲望に身を溺れさせたか、欲望すらつまらないものとして捨ててしまったか、この一点に集約される。生き様の違いが、彼らの間に明確な確執を生じさせていた。

白いシューズは積雪を背景にカメレオンのように同化する。空を覆い隠した白い雲。視界を邪魔する吹雪も相まって、水樹は探索に手間取り、思ったより多くの時間を費やしてしまった。艶やかな黒髪に白い結晶がこびり付いている。生まれつきのすべすべとした白

磁の肌が、体熱を奪われさらに蒼白となった。いけない。マフラーを身につけておくべきだった。水樹は雫がしたたればつららが生成しそうなシューズを手に、昇降口へ歩んでゆく。ずぶっずぶっと一歩ずつ、ゆっくりと、水樹の足が雪に埋^{うず}もれ靴下が濡れる。吹雪が校舎を削り、枯れ木がきしみ白く染まった。水樹の黒いシャツも例外なく白へと変貌する。

そんな白銀の世界で、彼の影だけがやたらと黒くて、遠い世界でチャイムが鳴った。

みんなそんなやつだった（後書き）

次話は来週の日曜日を予定していますが、まあ、無理でしょう。
目を通して下さり、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9872v/>

月夜の紫陽花（あじさい）

2011年8月22日03時26分発行